

2023年8月7日

立教大学国際学術研究交流制度
2023年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	外国語教育研究センター・教授
	氏名	森平 崇文
受入学部・研究科・研究所		外国語教育研究センター
招へい 研究員	所属・職	Associate Professor, School of Languages, Shanghai University of International Business and Economics 所属機関所在国：中国
	氏名	Xiao-Bo QIAN
招へい期間		2023年7月3日～2023年7月30日（28日間）
研究経費		724,450円

2. 滞在中の活動

来日および離日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例) ○○について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

年月日	活動内容
2023年7月3日	来日
2023年7月7日	セカンドステージ大学「現代中国のメディア」ゲストスピーカーとして「コロナ禍の上海」に関し講演、オンライン授業、参加者14名
2023年7月12日	外国語教育研究センターと日本語教育センター共催の講演会「中国の高等・中等教育機関における日本語教育の現状と課題」、池袋キャンパス本館1104教室、参加者20名
2023年7月20日	アジア地域研究所セミナー「中国における日本文学研究の動向—純文学から大衆文学まで」、池袋キャンパス12号館2階会議室、参加者7名
2023年7月24日	外国語教育研究センターと江戸川乱歩記念大衆文化研究センター共催のセミナー「日本の推理小説の中国語翻訳をめぐる一乱歩作品を中心に」、池袋キャンパス12号館2階会議室、参加者14名
2023年7月30日	帰国

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

セカンドステージ大学「現代中国のメディア」は履修者 14 名で春学期に開講、コロナ禍前までの 21 世紀の中国大陸におけるメディアをめぐる諸問題について講義を行っている。招へい研究員は 7 月 7 日の第 12 回の授業にゲストスピーカーとして「コロナ禍の上海」と題する講演を行った。ロックダウン下及び解除後の上海における日常生活や大学キャンパス内の状況について、招へい研究員自身の経験を中心に個別具体的に紹介いただいた。日本では当時の現地に関する報道が少なく、また授業でもコロナ禍前までが範囲ということもあり、招へい研究員の肉声は履修者にとって大変興味深いもので、講演後の質疑応答では多くの質問が寄せられた。履修者の中国理解を深め、現代中国に対する関心を高めたという点で、大いに意義あるものとなった。

7 月 12 日、日本語教育センターと外国語教育研究センターの共催で開催された講演会「中国の高等・中等教育機関における日本語教育の現状と課題」の内容は大きく 2 点に分けられる。1 点目は上海を例に中国の中等教育機関において、日本語科目が多く開設されている現象についてである。これは大学入試科目として日本語を受験するものの近年における増加傾向と連動しており、日本語受験の増加現象の背景には英語による受験を避けようとする傾向がある。2 点目は高等教育機関における日本語教育の現状で、特に日本語教材において、これまでの日本の文化や社会を題材にした内容から中国の文化や社会を日本語で説明できるものへと大きく転換があったことが指摘された。この背景には中国を積極的に世界に発信していこうという政治的戦略があり、受入教員を含む中国語教材を作成するものにとっても非常に刺激的内容であった。講演後の質疑応答では日本語教育に関心のある学生や中国からの留学生からも質問があり、活発に交流することができた。

7 月 20 日、アジア地域研究所主催のセミナー「中国における日本文学研究の動向—純文学から大衆文学まで」では文化大革命終結後中国で初めて放映された外国映画である、西村寿行原作の日本映画『君を憤怒の河を渡れ』が中国の観衆に与えた衝撃から説き起こし、芥川龍之介、川端康成らの純文学及び松本清張、森村誠一ら社会派推理小説、さらに西村寿行、大藪春彦らハードボイルド小説、そして近年における東野圭吾作品の中国における受容の状況及びその背景について紹介した。質疑応答では、東野圭吾作品が中国圏で圧倒的に支持される一方で、日本では東野とも人気を匹敵する池井戸潤の諸作品が中国語圏であまり受け入れられない事情、さらに中国のブックカフェなどの書店事情に関する質問があり、活発な議論が行われた。

7 月 24 日、外国語教育研究センターと江戸川乱歩記念大衆文化研究センター共催のセミナー「日本の推理小説の中国語翻訳をめぐる一乱歩作品を中心に」は中国圏において日本の推理文学史を概説した初の著書である『日本推理文学史』を上梓し、江戸川乱歩の短編推理集を中国語訳した招へい研究員が、日本の推理小説を中国語訳した経験を通じ感じた日本の推理小説の特徴、日中文化の相違などにつき講演した。乱歩に代表される近代日本の推理小説にはその下敷きとして西洋の推理小説があり、その翻訳においては西洋の推理小説に対する理解が不可欠であること、また日本の推理小説をより深く鑑賞するためには、東京という都市の特徴や構造、時代背景などに関する知識が不可欠である点を指摘した。質疑応答では質問者の中国体験から、日本と中国では空間的広さに大きな違いがあり、日本の推理小説を翻訳する上でその違いをどのように意識していたのかなどについて質問があり、また日中の若い世代が今後も文化交流、相互理解を深める上で招へい研究員の著書『日本推理文学史』が出版された意義が大きいという指摘があった。